

患者体験を用いた創傷ケア演習での看護学生の 気づきと学び

佐藤幹代*1・吉田澄恵*2・小島善和*1・城丸瑞恵*3
中村美鈴*4・村上礼子*5・高橋奈津子*6・佐藤正美*7

I. はじめに

創傷ケアにおける患者体験の重要性に着目し、手術後創傷部の観察やチューブ・ドレーン管理などを含めた一連の処置をシミュレーションする創傷ケア演習を試みた。患者体験を通して、学生が患者の感覚、認識、心理社会的影響を理解し、看護支援を思考するような教育的かかわりを検討した。

II. 研究目的

看護系大学2年次生の急性期看護論の単位において、模擬創部を装着し、患者体験を通じて創傷ケア（ドレッシング技術）を行う演習で、学生が気づいた患者体験と学びを明らかにし、周手術期看護技術演習の教授方法について検討する。

III. 方 法

2006年12月～2008年1月の期間で、胃切除術後患者の事例を用いた演習90分×2コマを受講した155名の学生のうち、研究同意が得られた学生の演習記録用紙137部。演習方法は、5～6名編成で、2グループに1名の教員が担当した。自作の腹部模擬創部を患者役が装着し、直接・間接介助、観察役に分かれ、手術後創傷部の観察やチューブ・ドレーン管理を含めた創傷ケア演習を実施した。演習終了後グループ毎に感じたこと、気がついたこ

とを話し合い、記録してもらった。Berelson, B. の内容分析を参考に、研究者8名で分析し、妥当性を確保した。倫理審査会の承認を得た。

IV. 結 果

創傷ケア演習における学生が気づいた患者体験は、137文脈単位、207記録単位が見出され、16サブカテゴリ、5カテゴリが形成され、表1に示す。

患者体験を用いた創傷ケア演習における学生の学びは137文脈単位、363記録単位が見出され、15サブカテゴリ、6カテゴリが形成され、表2に示す。

V. 考 察

模擬創部を用いた創傷ケア演習を通じて学生は、創傷ケアを受ける側からとらえた患者のリアリティに接近する様々な追体験をしていた。また、患者体験を通じて、学生同士ではあったが、看護師役の学生との相互作用から創傷ケアを受ける側からとらえた患者心理について、多様な気づきが得られていた。さらに、体験したことを手がかりにし、患者の思いや状況を配慮したかかわりを考え、創傷ケアを創造していく学びをしていたと考えられる。しかし、あくまでも模擬創部であることで、直接的な皮膚感覚や、疼痛などは追体験の限界があった。今後は、学生が体験学習可能な内容を予測し、患者の心理状況とケアニーズの双方をもとに学ばせたいことを明確にし、教授法を工夫する必要がある。

*1 東海大学健康科学部
*2 東京女子医科大学病院
*3 昭和大学保健医療学部
*4 自治医科大学看護学部
*5 獨協医科大学看護学部
*6 聖路加看護大学博士後期課程
*7 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻

表 1 腹部創傷ケア演習における学生の患者体験

カテゴリ (5)	サブカテゴリ (16)
1. 創部ケアを受ける側からとらえた患者の不安や恐れを追体験する	自分から見えないところの創傷ケアをされることには不安や恐れを感じる 何をするのか処置前の説明がないと不安を感じる 手際の悪さに関連する処置行為の不十分さから不安を感じる 疼痛を減らさないで不安が高まる
2. 創傷ケアを受ける患者の皮膚感覚、深部感覚、視覚などの直接的な感覚を追体験する	ケアを受ける際、いくつかの原因で不快な温度や湿度を感じる 膝を曲げて枕を用いると腹部が安楽だと実感する 腹帯で保護されている感覚を得る
3. 創傷ケアを受ける際に感じる不快な感情や感覚を予測する	創傷ケアの様子は寝ていると見えない 創傷ケアを受けることで感じる不快な感情を推測する 創傷ケアを受ける際に感じる痒みや痛み感覚を推測する 必要な処置ではあるが身体の一部が見られるのは恥ずかしい
4. 創傷ケアに患者の意識が過度に集中していることで感覚が敏感になり気になることが増している	傷口を見ることはないがどうなっているかとても気になる ケアに敏感になっているのでテープの貼り方や看護師の行動が余計に気になる 安楽な体位を保つ方法や創部の状態を十分に説明して欲しいと思う
5. 処置中は医療者に身を任せるしかない患者の認識を知る	安心感が得られるような声かけや対応をして欲しい 処置中どのように振舞うのかわからず医療者に身を任せるしかない

表 2 腹部創傷ケア演習における学生の学び

サブカテゴリ (6)	サブカテゴリ (15)
1. 常に声をかけ説明するなどコミュニケーションをとり不安軽減に努めることを考える	腹部創部処置の目的や方法、根拠をわかりやすく説明する必要性を考える 声かけや説明をすることで不安を軽減することや、回復意欲を高めることができる 信頼や安心をもたらすコミュニケーションをはかることが大切だと考える
2. 患者のプライバシーを保護し羞恥心を感じさせないよう十分に配慮し尊重したかわりを考える	処置の際、羞恥心や寒さをを感じさせない対応を考える 羞恥心を持つ患者の気持ちを理解し、プライバシー保護の重要性を知る 配慮することの必要性と重要性を考える 患者の意思を尊重したかわりを知る
3. 患者側の視点から創傷処置をとらえ安楽な手技やかかわりを見出す	患者の立場から工夫した創傷処置の手技や対応を考える 疼痛や不快感を最小限にする手技やかかわり方に気付き対処方法を考える 工夫したテープの貼り方や創部に合ったドレッシング材を用いることを知る 短時間で的確な創部観察の方法を行う必要を知る
4. 創傷ケアに伴うリスクを考慮し方法を考える	創傷ケアに伴う様々なりスクについて気付き対処方法を考える
5. 患者の反応をみながら処置行為を行うよう考える	患者の反応を見て判断し処置行為を行う
6. 未熟な技術や態度により患者が不利益を被らないよう継続した学習の必要性に気づく	未熟な創傷処置の手技や知識、態度は患者への負担を増すことを知る 創傷処置に必要な知識や、不安を与えない看護師の態度など継続して学習することの必要性を知る